

『水鳥記』とは

慶安2年(1648年)5月大師河原の名主である池上太郎右衛門幸広(大蛇丸底深)とその一族14名が江戸の医者で儒学者の茨木春朔(六位酒官地黄坊樽次)とその仲間16名との間で行った壮烈な酒飲み合戦の物語が仮名草子「水鳥記」です。「酒」と言う字がサンズイとトリから成り、サンズイは水、トリは鳥と洒落てみたのです。

『水鳥記』京都本は川崎市民ミュージアムに、『水鳥記絵巻』は川崎大師平間寺に収蔵されております。

水鳥の祭

「水鳥の会」発足にあたっては、川崎市の後援をいただき、会長の斎藤文夫氏をはじめとして、川崎市の各方面の方々に発起人としてご参加いただきました。平成7年の第1回水鳥の祭では会の発展と祭の成功、さらに地域の発展を祈願して、川崎大師平間寺貫首第四十四世中興第一世高橋隆天大僧正のご揮毫による「水鳥の碑」を若宮八幡宮境内に建立いたしました。

第2回以後は、川崎大師平間寺の境内において故事にのっとり、大師方15名、江戸方17名がそれぞれの人物に扮装し、江戸方は東門前駅前より平間寺に向い川崎方と合流し、平間寺境内から仲見世、表参道、川崎大師駅前、ごりやく通りを経て若宮八幡宮まで、問答合戦を取り入れた練り行列を行い、若宮八幡宮では両大将による酒合戦で大いに盛り上がり、最後に地黄坊樽次の「和睦の舞」が披露されています。若宮八幡宮境内では、利き酒大会や投げ餅、鏡開きも行われました。



大坊 本行寺



朱漆塗りの大盃



水鳥の碑と酒合戦350年記念碑
(若宮八幡宮境内)



祖先の墓地 池言坊
(川崎区大師駅前2丁目)

池上家と大坊本行寺

10代目池上太郎右衛門藤原宗仲は鎌倉幕府の番匠の頭(作事奉行)を勤めており、鎌倉に出仕中たまたま日蓮上人の説法を聞いて以来深くこれに皈依し親交を結ぶに至りました。弘安5年(1282年)10月13日、日蓮上人は宗仲の屋敷で入滅されました。宗仲は屋敷の一部を日蓮の弟子たちに寄進し、寺とし大坊本行寺と称しました。

池上家と『水鳥記』

水鳥記に登場する21代目池上太郎右衛門幸広は大師河原の地が河口で肥沃なのに目を付け、先祖宗仲より伝えられた宝物・家財・家屋敷を池上本門寺に寄進し一族郎党を引き連れ大師河原の厄除け大師堂の北側に(現川崎区伊勢町)移り、大師河原の開拓に着手したのであります。幸広は酒量限りなしと言われ、自らを大蛇丸底深と称し、その名を天下に響かしていました。池上家には多数の酒盃が伝えられていますが、最大のものが「大蛇丸寝酒の盃」であります。次いでの大盃は「蜂竜の盃」で、これは8代目の友康が源頼朝公より拝領したものと伝えられているものです。

大師河原の酒合戦が行われてから350年目である平成11年5月、地元文化の継承と保存を念じ、32代目の池上幸政・よ志子夫妻が若宮八幡宮境内に350年記念碑を建立されました。現当主は33代池上幸定氏。同家は崇祖の志篤く、屋敷内にあった祖先の墓地(現川崎区大師駅前)を大切に守られています。墓所は池言坊と称し、幸広以来の一家一門の墓塔が数10基あります。清掃には常に心をくばっておられるのでいつ詣でもすがすがしい。若宮八幡宮共々ぜひ訪れてほしい場所でもあります。



日蓮大聖人ご入滅の霊場
日蓮宗本山

大坊 本行寺

【ご臨終の間】「お寄り掛かりの柱」などを奉安し、ご入滅の当時に今に偲ばせております。

東京都大田区池上2-10-5
電話: 03(3752)0155

若宮八幡宮

川崎市川崎区

大師駅前2-13-16

電話: 044-222-3206